

Takashi AKIYAMA Poster Museum Nagaoka

2009-7-1

APM news 003

秋山孝ポスター美術館 長岡

歴史的建造物・金庫扉と雁木のある美術館（旧北越銀行宮内支店）



秋山孝のメモランダム・抜粋 - 1

「ぼくの小学生時代の絵」

まさか、絵を描いて生活をするとは思わなかった。今思えば、子供の時からずっと絵を描いてきた。と、すると小供時代の絵に対するぼくの思いと関係を語らなければならないだろう。

ぼくは1952(昭和27)年生まれだから、ちょうど57歳になっわけだ。2歳ごろから絵を描いたとすると、55年間休まず絵によるコミュニケーションと表現を貫いてきた。その背景は、生まれた環境やその周辺の自然環境の影響によって表現をする感性が出来上がってきた。決してぼくひとりのものではなく、あらゆる全ての物、事、人から育まれてきたものだ。だから子供時代の出会いは、ぼくの感性の基礎をつくり上げてきたのだと思う。それは、大げさのものではなく、ほんの日常の出会いの感動の連続でしかないのだ。絵を描くこと自体は、ぼくにとっては、そんなにうれしい作業ではなく、描き終わったときの達成感と、周囲の人にみせたときの喜びの反応がぼくをよりいっそう満足させてくれた。

小学生時代の夏休みの宿題の絵は、ぼくの絵を描くことにおける葛藤のスタートをきったように思われる。つまりそこで、絵を描きながら、表現世界に対して自問自答をその時間の中で、繰り返していた。絵を描いていてその間に考えることの多さには、ヘトヘトになるほどの疲労感があった。絵を描くことは疲れる、ということがここで認識できたのだ。それまでにはそんなことはなかった。

しかし、算数の問題を解いたり、国語の作文を書いたりするのは違って、色彩の輝きの美しさ、描いたマチエールのハーモニーの美しさ、形のシルエットの美しさは、ぼくにとって感情の喜びと美的な快樂にひたれる楽しさがあった。それは、気持ち良さに対する欲求が強かったのだと思う。この感情は小学生時代のぼくが描いた絵に強く感じることができる。と、そんなふうになんて思っている。